

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



東坡志林

木五

卷

關東古戦録卷之二



目錄

○小楯半七郎為者

附 原十太夫車

○一色太良左衛門生立

附 西田伊豆車

③ 城戸次良太郎生立

附 盲父逢劫害事

④ 城戸持廣仇討

附 石黒彈右衛門事

⑤ 長尾監物生立

附 山中異人事

關東古戦録卷之二

小楯半七郎為者 附 原十左夫事

爰に信州柳の城中にて免九郎が悪行漸々露顯し殊に城中を窺ふ企及く知れるに城主以外怒いまい彼が家を取巻て打捨たりす處と下知あつて是様大將河合將監担子拾得百人の足控を有具して城下を巡る九郎が家を丸巻悪行の起くところとて尋常に總をかゝる處といひけるに九郎からくと免企あらまふに陳に不に河合一審は城中を撫切るゑとてきた。免等ありて吾を防んや殊に家中の諸士多く吾一味せりて免に今に名するゑ十左夫一番は隠れて妻女を人質に牛今諏訪の陣に参りて我將ある間必城中に潜るゑと云

是ハ將監の如うと思ふ人を走せてこれを城中に告
 げしハ城中甚強き士大將を以て十を夫を諸同のよ
 沢分明に立たれども妻女あつたれば云云圖に貞あつた
 中の討多をえられた許なく決に誠を討多うと市
 へ見ゆれに原達て預よりつて山味に預られ因のご
 ちて石臭したうされども將監士率より下知して齒を
 極て掛しに九席大よりハ成王六を刀を提て令限は
 に固て手負死人数あれば將監も多にあまう一回
 押取卷より鬼九席精練を雇て切て廻り遠を見我屋に
 て戸を閉たり將監いさで下知するに鬼竟の捕多三人一
 時に戸を押きて掛入を九席のた右忽切傷せうこの路
 に逃易して一人も進不た將監も後方牙を嚙て振り下

一人の若武者つと来て將監よりなるハ今日の為者を
 剛強にて市難義と相見えうあられ某に許あうハ討捕
 んと云るに將監これを見れば其形相自餘にまづれて
 無双の英士あるハ何を言て一覽の通多人数死亡に及
 是下の助力あう人事事あり討多ありハ某主人に
 中望の節あうバハう極たお徳よりと念ひに中られ
 ハ彼士妻細むつうと其後より九席戸に立ち向ひ
 舍釈もなく戸を押きて馳入るありあまや一刀の下は命を
 失ひはんと見やるもなく鬼九席が首提て立出將監は
 渡しられハ大驚てこれを尻に眉間を切割るう極ハ
 初た刀眉よりあま二の老刀めて首をお落せしとそれ
 た少の有餘なく入りしと見へに忽に討多う古七

双のたの討殊に名は貞子鬼九郎あり。將監始に將あ
 きて居るも、將監下馬して礼を厚し。君ハ誠に人
 ありといふも、姓名いかん。侍人の臣なり。と尋ね
 ハ。彼士取あへど、武將ハ本國にて。當時ハ浪人にて。武者候
 行をもと。小指は七郎とや者也。藩士京十は、妻ある婦
 あり。か女國より同道せしに、途中にて鬼九郎が為は、妹
 集れ。諏訪中に入て、彼が居宅を穿鑿し、た末、彼等へ
 も不承れハ九郎を捕へ攻めんと。当地は、来る村、高井
 村。されハ、まずに九郎をお面せりと。始終を物語して十を
 又ハ對面を乞われハ、將監一々、鬼九郎が詞によりて
 十は、妻國とあり。浪江ハ、城守の討に、向ふ。妻、細江
 れハ、小指大に驚て、一先、浪江氏に追付て、中の物語を

述ん、亦う救逆いつ里の赴ハき、取あり、置く城主に披露
 願入と眼をえて立出れハ、將監も同属主人に事て、京氏の
 汚名をそぎ、計より山城へ急進せんと相約して、城中へ
 引取られハ、小楯ハ走らざるを急ぎ、山中へ馳行ぬ。此時山
 形八郎ハ更科へを急げらるるまで、流汗人敷、行違ハ
 王例によりてこれを急ぐ下率に近寄て、何方の討手
 るやと問へど、誣訪山中、紫川九郎方への討手なりと云捨
 て、欠行す。山形これをき、てあき、鬼九郎ガ無行ありとれ
 て、近郡の大將あるの討手あらん。小楯ガ姉の身の上記つ
 かろく、猪之ハガ難哉、其供ハ、捨をうきむと、死て返
 討手の計は、續より、山城ハ人数を助て、山中ハ彼門お
 小馬を止め、下知を傳て、深くとお入て、片端を撫切よ

まべーと門を突て大勢一同に入る。門を守り盗大に
駭て二の門へ駛入て相闘の具を喰われぬ。八方より人数
集り門を破られぬと支なり。猪之八門内より大者出て河
方より討ちなり。こゝより少の覚なり。名を勝負あ
るべしと呼ぶ。山城突て盗賊より向て来る。河なり。人質の
女系をこかたへば。降参せよ。命をばゆんとにくさげ小
云々。猪之八大に腹をきて推参る。河なる。察るに近
郷の盗賊系。廿八中を系取んと。いふ。寄つるなり。ん
て。盗の程をえとべし。と。先んきて盗共二三十切先を揃
て切て。あつる。参をせん。と。戦ふ。奇手の内より。虎虎の
武者三騎。一同は取参り。猪之八突て。太刀取参り。先よを
む。大の男を首中にお参り。たの武者を。か。と。刀を。と。腹

を。かけ。と。切。拂。へ。八。騎。の。一。人。逃。出。る。を。追。詰。て。げ。と。掛。に。切。
倒し。即。坐。に。三。騎。を。切。殺。せ。ば。い。働。に。氣。集。り。大。勢。四。度。河
に。ある。所。に。山。形。八。郎。一。文字。に。近。参。り。横。さ。ゆ。り。難。な。れ
ば。猪。之。八。始。盗。た。これ。に。参。を。ゆ。て。一。同。は。面。も。ゆ。り。と。切。掛
れ。ハ。寄。手。忽。駭。軍。し。て。一。の。門。を。逃。出。り。八。郎。猪。之。八。よ。向
て。敵。ハ。大。勢。あり。討。却。参。り。ハ。加。勢。も。あ。り。ん。大。將。を。討。参。ハ
不。参。て。追。拂。ん。り。や。有。と。向。々。れ。ハ。臨。分。と。駭。り。と。参。速
に。取。出。せ。ハ。八。郎。強。弓。を。撥。て。ゆ。り。と。張。と。か。り。矢。取。て。お
つ。ぐ。ひ。山。城。を。目。掛。て。切。て。放。せ。ば。河。や。海。さ。も。流。に。が。胸。板
う。け。と。射。通。し。後。は。あり。ける。年。々。松。に。羽。ぶ。ら。り。参。て。さ。い
ま。り。士。卒。兵。膽。を。け。あ。る。思。い。矢。先。に。逢。人。者。生。て。油
人。板。ハ。なし。と。臆。病。神。の。附。く。所。へ。八。郎。勇。ん。て。矢。續。お。に。射

あれハ、月とうなつた。崩れて右に左に進行する。ある
所へ小楠寺と即ちみよんで欠付く。いふ有る海を人々
も怪や。山中にぬき射術をある者買ひ。改めて對面せ
んと立寄り。う去にてもい興を拾ふ。そ心得ねど。兵を用
ハ三寸計の士を執りて坐居る。半七郎心付。君ハ原氏まで
まゝ。海とやと釣ける。唯眼を開て一言の差。隙之
ハ。是より欠付て小楠に向ひ。君ハ如何して。ハ。来玉。や
と。少ひ。うき。さ。半七郎。更科へ。立越へ。に。免九郎ハ。科人
と。あり。死物。粒に。傷く。城。中。の。徳。士。も。て。あり。ある。を。君
一刀ハ。切。殺。し。原。氏。に。見。せ。んと。ひ。な。れ。る。此。所。へ。の。討。手
に。従。て。固。と。あり。来り。あ。つ。と。固。ゆ。人。々。何。合。格。監。に。城。主。へ
汚。名。を。そ。く。題。を。ね。み。討。手。を。止。め。よ。来。る。不。遅。急。して。恨

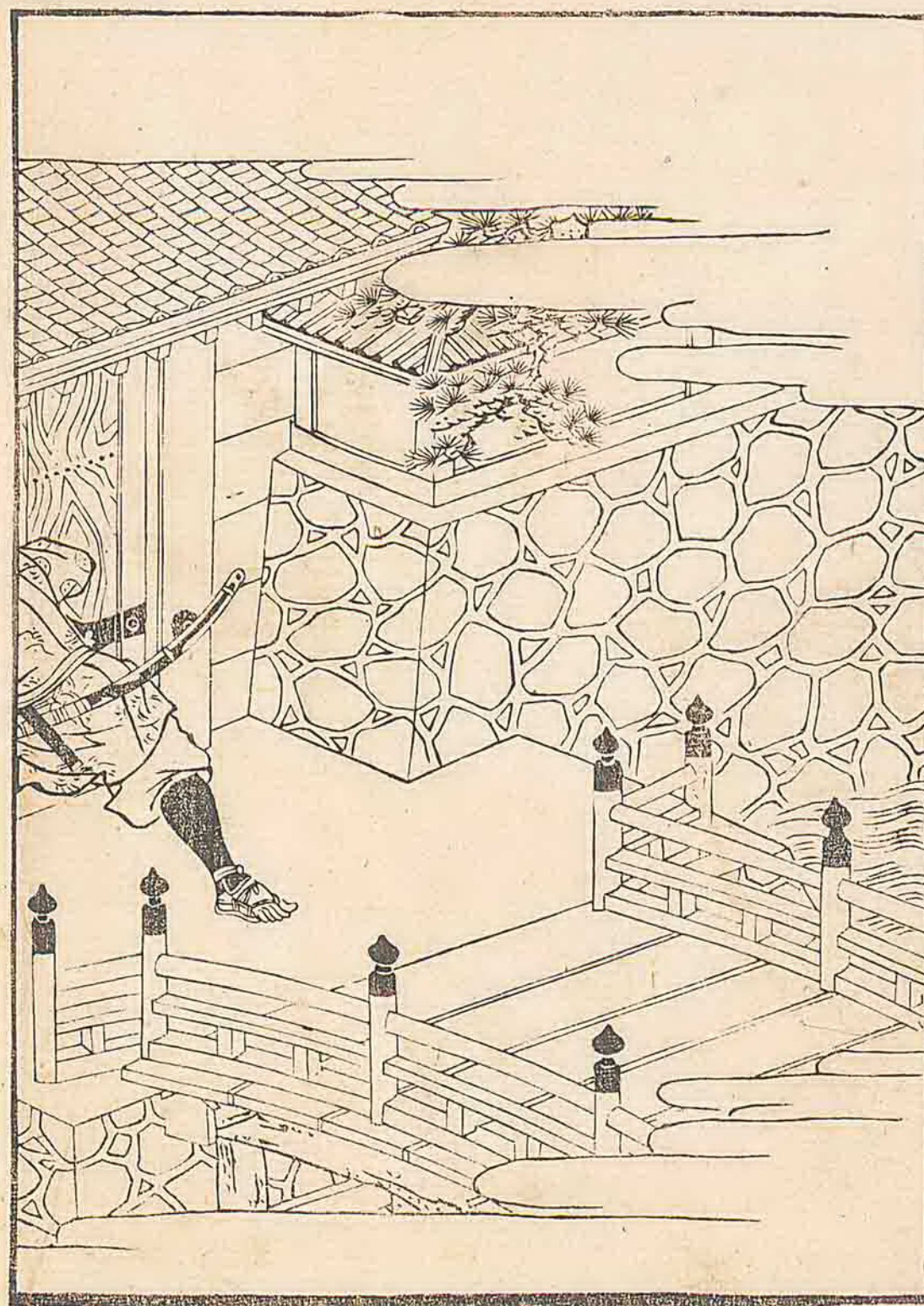
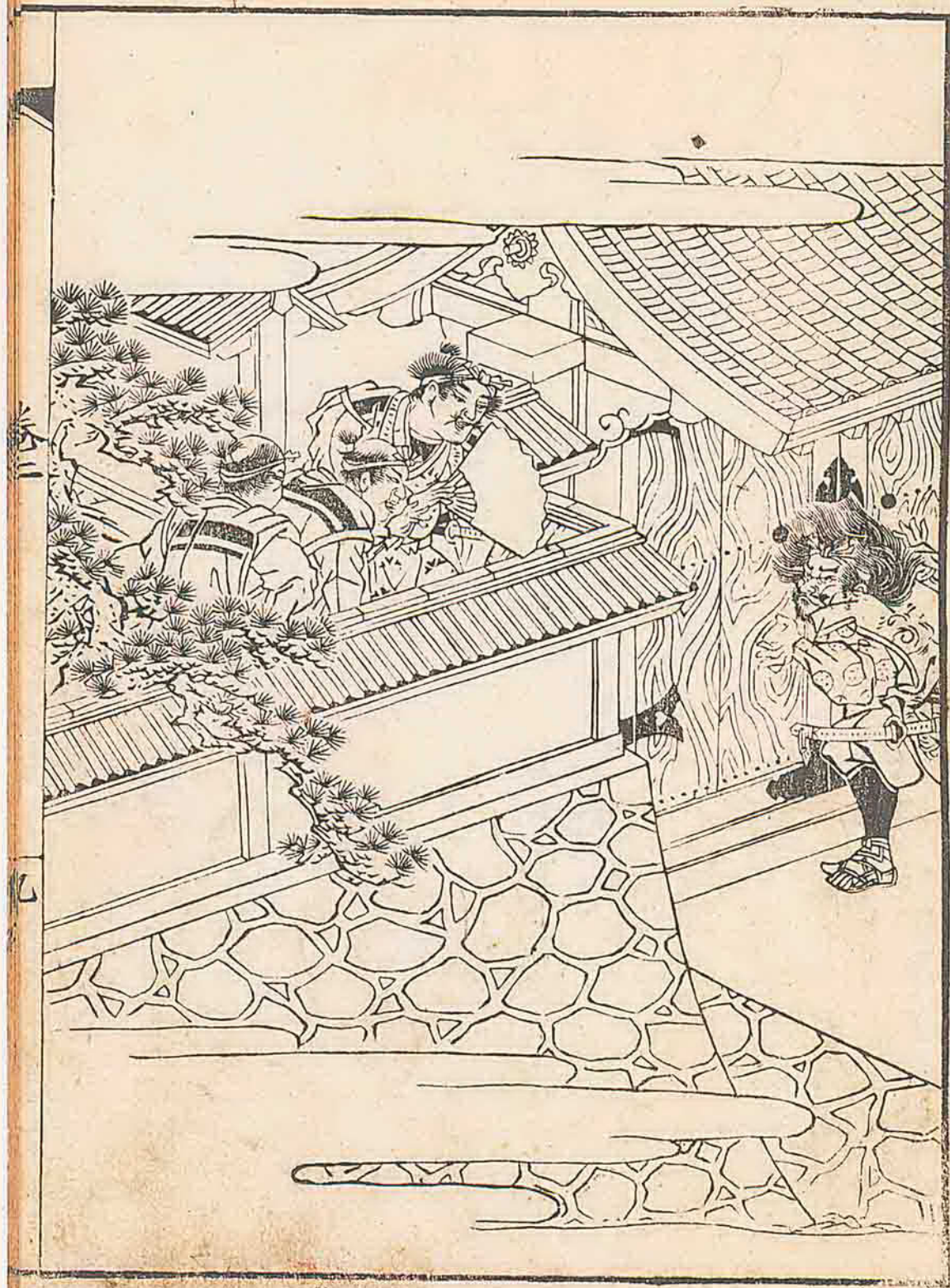
めを討捕しハ。此等ハ。楚忽にあつて。時。敵。主。来。て。是。れ。も
か。し。此。固。ハ。原。氏。と。察。れ。共。我。を。守。て。名。案。あ。つ。と。語。り。固
に。ハ。郎。心。付。て。婦。人。ハ。此。由。通。け。れ。ハ。逸。急。に。馳。来。一。目。見。る
より。い。わ。る。飛。あ。つ。て。角。張。る。布。を。板。と。取。乱。し。泣。ける。ふ
十。を。走。眼。を。開。き。己。憎。ま。女。め。男。に。對。面。と。云。な。つ。て。能。も。盗
賊。の。家。に。は。そ。ゆ。り。居。て。夫。に。叛。逆。の。汚。名。を。そ。く。也。刺。討。手
の大將を討捕れハ。某。何。の。面。目。あ。つ。て。再。排。へ。立。ゆ。人。々。若
者。海。の。牙。半。七。郎。と。云。な。つ。て。一。器。量。骨。柄。天。晴。英。士。と。見。ゆ
き。兵。に。は。居。る。と。わ。り。ハ。偽。も。な。さ。盗。賊。な。り。固。茲。河。も。り
ま。さ。ず。海。も。唯。今。離。縁。し。他。人。と。ま。さ。ハ。兄。弟。して。吾。首。を
討。捕。て。討。手。の。大。將。候。と。共。に。な。れ。よ。し。て。責。て。某。が
汚。名。を。そ。く。が。せ。よ。と。河。を。ひ。て。云。け。し。ハ。半。七。郎。も。恥。入。事。也

女ハわつと十方にられ唯お伏て泣居る。板子を見渡して
 山形八郎進出て云々。ハ某ハ旅行の者師の悪仇を尋る
 とて嵩山中を通掛り内室の危難を見に人々これを救
 ふ。内室に不意お人の款は出合て。何かくこれを討めて立
 向に内室の行衛を見失ひ此所へ尋来て。お細の板子を
 届即内室の書翰を持て。お小楯氏へ達人として立出ら
 乃て討手の由を問ふ。お小楯氏の中にかゝると
 ハ思ひの如く立向て猪之八を助け討手の大将もさきに
 掛て射殺る。内室小楯氏に於て恥も義も留る事あふ。只
 と終始洋に兵舌流れく語りけるハ。十太史記を低て某
 助あつて機をふせ事不融い。るる。涉方う存ね共。恨の
 深志感謝に人々。物語より。て妻女兄弟の身に曇りを

きも某承届て。王老にても。某の義兄武勇殊更。お場所の鏡と
 を世末の御り。涉姓各多。ふと述べ。ハ某本國ハ奥筋
 にて山形八郎季照と申浪士あり。何事も静に熟話る。及べ
 一先坐布へ入る。と猪之八に令じて。この優き入れ
 ハ女房小楯附添て縁の上にて。某七郎手板を推碎て奥へ
 清に。及にて小楯山形と始て對面す。何くの謝辭を述べ
 るに。十太史兄弟に向て。やけるハ。山形氏の物語に。うつて。お
 人の心底。某親着せり。然る某。某の山形。坐て再城中へ不
 意にて切腹して汚名をこも。し。小楯縁者の好み。は猪を
 なし。おれと思切る。る。板に女房ハ涙に。れて伏沈ハ。某七郎こ
 れを。お仰む。ハ。共。今切腹あ。う。とて汚名清む。し。其
 忠。お。と。誤ハ。山形討死。る。と。即。嵩。中。を。兄弟の。居。る。

れは兄弟交好（けんごう）仇（あだ）せしと云ふこと。むは合符監（あひりけん）鬼九郎を
討捕（うとく）し時を公の頼（たの）みあらわす述（しよ）を記（し）されし其意（そのい）ハ城主
一通達（いつつうたつ）あるべしと。不詮（ふせん）吾（われ）兄弟（けいだい）世取（よとり）にて自殺（じく）をせしと有
を以て罪（つみ）あるを証（しやう）を訴（う）めり。お我（われ）あるはいと云（い）われハ女房（にようばう）た
悦（え）でえ來（きた）我（われ）のともを疑（う）を受（う）めハ自（みづか）を切（き）殺（ころ）して所（ところ）名の
暇（ひま）を立ちし人（ひと）先（まづ）ある半七郎（はんしちろう）ハ主（しゆ）に指（さ）されハ難（あや）有（あ）り
らんと云（い）けるに。緒（いと）之（これ）ハ進（すす）出（で）て某（ある）山中（やまのちゆう）を預（あづか）るる主（しゆ）と
て討（う）ち殺（ころ）す人（ひと）救（きう）損（そん）しハ山（やま）主（しゆ）兄弟（けいだい）の露（つゆ）やとも不（し）知（ち）事（こと）されハ
某（ある）を討（う）ち捕（とく）て張（ちやう）本（ほん）を討（う）ちて妻（さい）室（しつ）を返（かへ）せしとありハ所（ところ）名の
清（きよ）じとと潔（けつ）中（ちゆう）けれハ十（じゆ）老（らう）丈（ぢやう）涙（なみだ）を流（なが）し何（なん）もの心（こゝろ）底（そこ）感（かん）を
るに餘（あま）りあり。か熟（じやく）く思（おも）ふに。山（やま）形（かた）氏（し）小（こ）楯（たて）氏（し）ハ仲（な）く兄弟（けいだい）の
種（しゆ）類（るい）にあらず。いふに海（うみ）にも天（てん）下（か）に功（こう）を立（た）すの蘭（らん）も某（ある）ら

う共に語る量（りやう）はあらず。并（なら）に緒（いと）之（これ）ハの武勇（ぶゆう）義（ぎ）も善（よ）し
後（ご）れより。三人（さんにん）心（こゝろ）致（いた）し一致（いし）あり。當時（とうじ）戦（せん）國（こく）のるは大功（たいこう）を
て顯（あらわ）すの極（きよく）子（こ）吾（われ）死（し）せば必（かならず）生（なま）残（のこ）る所（ところ）にあり。小（こ）義（ぎ）の爲（ため）
に英（えい）士（し）を損（そん）ぶとと心（こゝろ）より。お村（むら）上（じやう）家（け）に於（お）て普（ふ）代（だい）恩（おん）顧（こ）
の者（もの）にあらず。一時（いつじ）君（きみ）臣（しん）の約（やく）を破（やぶ）るの。殊（こと）に主（しゆ）君（きみ）勇（ゆう）を
餘（あま）りあつて人（ひと）主（しゆ）の器（き）を不（た）く。家（け）亡（な）し。此（こゝろ）度（ど）の憂（うれ）を幸（さい）
に退（ひ）き。各（おのづか）英（えい）士（し）の行（ぎやう）末（すえ）を思（おも）ふ。自（みづか）殺（ころ）を止（とど）められ。お
小（こ）楯（たて）氏（し）身（み）は座（ざ）を恨（にく）んで。半（はん）七（しち）郎（らう）やけるハ。おまゝて更（さら）料（りやう）を
お給（たま）を向（む）られん。あれと戦（せん）んも。一（ひと）旦（たん）此（こゝろ）所（ところ）を去（さ）去（さ）
へ。お公（こう）丈（ぢやう）婦（ふ）ハ根（ね）本（ぽん）と共に上（かみ）州（しゆう）へ行（い）き。某（ある）ハ下（した）
の者（もの）を離（はな）れ。てを國（くに）を踰（こ）越（えつ）し。其（その）業（ぎやう）を誠（まこと）べし。山（やま）形（かた）氏（し）ハ
赤（あか）松（まつ）州（しゆう）へ攻（こう）む。後（ご）來（きた）永（えい）く書（しよ）通（つう）を以（もつ）て好（この）む。不可（ふか）失（し）と云



に八房大は勝び大功をおさる。必しも主を得るに何れ氏系
のく大畧の人あり。互に知せて共は仕て駿豆城伸へと
あそ。酒肴致調て十分は碎を盡て別をせり。吏より小
指は手下の者を集て次第を語り財物を分散して。諸之ハ
に令てま心くに任て。いつきの張本へあそを移さる。め
因の女を呼出してて家え致さる。に多ハ近邑のりのふれ
それく人致附て送致。それハ何も涙致流し恩を謝と
其因武州八王寺の農家の娘。殊は美麗なるあり。里程隔れ
ハ手下の者に送せんも如何あり。幸ハ房甲州へ掛て接り
あつ。ハ五寺送送あらんや云けり。に山形も穽しが
いく交合て一人のを僕を具して。翌朝ハ山伸致立出て
いかれてむ急る。二星始て爰に相逢と云。大時未あそ

忽に多難を其過人より。若行車後の章を見て可知

一色太師丸衛門生立附西田伊豆事

ト総國古河の城にハ足利晴氏公在城にて武運衰弱と
云。ハ志信の諸將を悉く常に系ねありけむ。ハ城下自
ら縣て人家軒を連て謳奇不斷を來奇異の士あつて。來佐
弟の丈六尺を餘にして。盤空さゆま生より。眼の光物をこ
く力量万人より超て。牙の輕き事。智の如し。は者え來羽州米
沢の生れにて。父を一色伝濃と云。祖先ハ諸侯ありしが代
く衰廢して浪士となり。東奥に沈淪をせ。老てみる記事を
愁て。母有郷あるふより。て武州秩父の妙見山に。氣落せ
しに。越後國の住人長尾お光と云る。夫婦の人。これハ妙見
山に詣て。一人の嬰兒を伴へり。一色より妻これに。問て云。あ

所幼年の男子を連れて爰に來りふいふある願望ありやと
 云けるに。彼妻女をけるハ吾々夫婦子のなき事を結て此
 山に丹誠を盡し。竟に懷妊して十二月よりて此子を役
 けり。身体健なれ。物言事不能。尚年三歳あり。因茲夫婦
 歩をハランで。願訴をかさん。と。昨日爰に來。神祇をおせし
 むると。ふくく。咄て口を閉て言ふ。父も我方も大に驚愕
 て。金く神霊の化身と。乃に保て。難有と。諸々るに。一色う妻
 も。そくろに。感涙を流し。七晝夜誠心を。抽て祈願をか。州
 州へ。ゆける。果て。なる事。ある。漸く。七ヶ月よりて。男子
 を。生ず。生て。抱云。齒妻く。生。能歩。行。と。父駭て。是鬼童なり
 と。谷底へ。投棄し。に。須臾にして。立ゆ。れ。里。を。怪。と。云。大。恩。を
 の。情。再。教。に。不。忍。育。上。る。に。凡。人。に。も。づ。れて。ハ。九。菜。まで。大

人の如く。父母相繼て。強し。けれハ。近。邑。憐。て。これを。養ふ。に
 替。か。人。に。勝。れ。大。石。を。投。中。大。木。を。捻。切。て。常。の。戯。こ。も。角
 力。を。取。る。に。大。男。二。三。人。して。は。倅。に。勝。こ。と。わ。こ。ハ。む。後。に
 ハ。衆。人。空。恐。く。自。う。育。助。さ。る。者。あ。け。れ。ハ。或。ハ。獸。を。追。て
 裂。て。食。と。人家の。俵。を。引。中。て。自。炊。て。一。時。に。三。四。升
 を。飯。と。十。六。七。歳。に。及。て。我。を。慢。者。あ。き。ハ。取。て。押。さ。く。め。て
 亮。令。さ。せ。或。ハ。大。木。小。樹。付。あ。んと。さ。る。故。に。諸。人。あ。く。み。果
 て。領。主。に。訴。追。逐。さ。る。と。自。ら。一。色。大。所。た。傍。つ。時。範。と。名。を。あ。て
 ま。り。奥。州。郡。州。に。て。力。を。誠。し。を。來。高。所。に。來。て。少。の。所。縁
 を。求。て。住。居。せ。り。見。人。恐。て。近。付。者。あ。ら。ね。ハ。一。色。思。け。る。ハ
 我。浪。士。ある。故。人。侮。て。吾。を。疎。む。仕。友。せ。ハ。人。難。親。ま。ん。だ。我
 ハ。足。利。普。代。の。臣。下。あり。他。の。諸。侯。の。臣。と。り。づ。ら。と。事

高城の主公ハ我主家あれハこれに仕人と欲て自ら城中
 に入て仕友せんと欲大諸士心に其形相を要て面取
 得て洵けきハ一色誠と心得不足して皮に就んと民家
 に偶居して暮けるが、囊錢を旅宿の主も迷惑に及けれ
 ハ一色心せられて城中の士とて頼重宅へ移て。官に
 就やうにあつたれ、たぐハ洵を打殺して血を立
 退きて高城へ仇をなすとて眼をいらけてせり立れ
 ハ一色震い慄にまうて洵をいれ、士隊將に訴て
 向後城中へ一色城入る事あるれと觸れハ是を聞て
 一色腹を立門を鎖より大我押破て這入んに、何条雜事何
 らんやと只一人城門に至り扉を押に震動てあり名押
 破ん物あれハ城内大に動轉て免角審て其上に仕方わ

らめと足輕隊將立出て腹をむあり、成程高家抱んに
 相違我共狼藉ありてハ死物と射とくめん神妙に旅宿
 に洵をハ事より抱んとハ方々矢尻を捨て掛
 れハ一色も死物にかゝ迷惑して然ハ旅宿に相付んと互
 洵ハ士隊將おれて一の謀を案出、兵舌の士我撰て
 酒肴を多調て所の者も能吞ゆせ、一色立へ差遣、押付
 仕友筋より沙汰あつて、支遣一献を酌れよと念ひ
 云、あまけきハ一色量限れて酒は渴やあつたれハ、更
 受吞けるを近儀の者募集し極くに心を盡て強々ハ
 一色心いさみ吾友よ就を知て皆あてりてなす面白事
 と思て救盃を重て飲新酔つれて、人前もお忘れてそ
 伶僞もて爵の色雷の如し仕済うると大勢群あて、鉄鎖を

以て七重八重に掛けたる熟酔しそあれを不意戸板に響
 て大勢にてこれをもろひ一所の土着に連行て柱をつ
 く縛付戸を鎖で密くゆけり。目も暮に過で一色酔め
 て眼を穿さ大に駭て押切んとするに。あやうく縛られハ
 中く切當に極あり。あハ安果て熟く思ふ。皆貴族を
 頼て人を蔑如せし。故に此災難に逢る。あバ詫言て
 いふ。めを解り。ひまに仕方あるんと。人や来と。何
 所に亥刻に及て一人密に歩きて戸を押ひ。死愚吏を以
 て一色を照し。見て柱の結を解て我の身をゆき。あり。我
 流て来べしと云に。一色大に悦て面縛の俣。世人流て行
 火を消て戸を元の如く鎖し。先よ立て。城下離れ一里計
 約ハ。一つの家あり。戸を開て入に。燈火明に。素麗なる庭布

ありこれへ傳て彼士自ら鉄頭を解て下部を呼で食事を
進められハ。一色恩を謝して食し終り。備しも君ハいうる
人にて。某ハ危難を救めりしと。同様に彼士中けるハ我
ハ西回伊豆と云浪士あり。義年より軍器を好で主君を求
れ共未得。久之。折は浪居せり。猶は往日足下を足し。日本無
双の勇士あり。何卒交を結で共に大業をなさんと云。ある
るに。時をうけて親く相見と云。今日人の噂を聞に。城中
を。取を聞ると。あいさど。方便て。搦捕人志をむ。失んと云。是
と我大に驚歎し。英士。六天下の奇策あるに。城主傾運の時
きて。却て是を救んと云。何ぞ社稷が久く保んや。固茲我
等に。忠て。美而を免。めり。人あられハ心を休て。安んず。わ
れと丁寧に述べられハ。一色此人を見に。色白く。眼光朗に。智

量深遠にれハ怯て恩を附し君の活命の爲み滅ぶ大あり。
願ハ力を助けあつたハ。城中一切迎て吾を方便し奴衆を
撫切りて。恥辱を雪ぐしと早欠出とべた勢あれハ。西回
これを押止て。其所の危難ハ皆自らあせむ所あり。此度の
変も強て官を望めるに因て。城士詮方盡て一術を以て極
捕り。金くま所の強を以て。其理に任んとするに因り。
是を所の逆とあらずや。彼よりしてハ。只糧藉とせ世人
の志にさる所なり。其所これより心を改て武藝を鍛練し
て。諸國を廻り。明君を撫て仕へ大場を踏て力を盡され。
いふ軍の内にして。有実者をさうくあし。武名を天下に
顯こそ勇士の快とする所あり。何そ筋るに恨を令て。人
王に死を願ぶる下。命の碎粒とむうとんと。深くと哭ん

をるせば。一色始て大に悟り涙を流て。海らね教訓実
心腑に銘どる。少ハ君の意に従て。武者修め。武藝
を試み。明君を求て可仕と。赤色酒面よりわらうる。西回
も深く収て。其軍果を許す。武藝の次第。武述るに。一色大
心恨して。其義を結て。後事を約し。一色ハまより。旅立
して。上総の方へと急ける。古河城中にてハ。一色を歓迎して
大に騒動し。其果恨を令て。城中へ切入り。誰う是に可飲
と。奉行政人ハ。外愁けるに。誰うと。城外の末は。住居
あり。西回。何と云る者の家まで。一色。城見より。と云。解
ま。士隊將。西回を拒けるに。須臾して。来られハ。士
隊將。けるハ。當城の科人。一色。太良。津門と云者を。捕
縛を以。繫。其に。赤中に。遁。出て。何人。不知。其家まで。其

くる者もて振らる。いふれハ、死人を止宿あさうめ
 ると云。西田も不強一色ハ、死科ありて振られしと某
 ぞこを知らんや。成程一宿を乞ひにゆて止宿を許さる。死
 科ありハ、牢居あるへ。獄屋ハ、番人ある處。強カれ
 ハ、鎖まで振られとあり。惟うれを解許さん。内詮
 儀、いふて、福もあして人を止宿をせしを攻ると
 能くするや。あさうと、延容して云れ。バ、士隊將
 団にしてきてやける。ハ、油軍界達して、由人の沙汰ある
 所あり。せと一色、尚城へ推来せし時、退るも段あるや。西田
 笑て、弟人を拒て、戦て利する。城郭や、勇士を討捕ハ
 をハ、花箭あり。せとハ、槍牙を、今や天下、銭の巷とある。新
 夕、銭法を考ふ。この時も、あて僅一人の力士を思ふ。とて、怪

万一、た、居、九、衛、門、の、諸、軍、の、多、に、餘、ら、ハ、某、處、に、振、捕、て、振
 出、さん、必、心、に、掛、ら、る、ゆ、し、と、憚、る、を、け、れ、ハ、士、隊、將、大、に
 加、入、て、其、後、一、言、の、詞、な、く、西、田、も、服、を、乞、て、吾、家、へ、こ、そ、ハ
 ゆ、け、る

城戸次所太良生立 育父達切害事

安房國主里見刑部、女輔、我、克、武、勇、に、ま、く、れ、北、条、氏、綱、と、律
 指、つ、て、い、ま、さ、雌、雄、を、決、せ、ず、諸、士、勇、敢、に、し、て、武、藝、を、勵
 し、暇、あ、れ、ハ、山、に、入、て、獵、を、さ、し、馳、走、を、試、む、或、時、諸、士、十、數
 人、山、中、を、獵、く、ら、し、里、へ、出、る、に、十、五、六、歳、の、女、子、古、鎗、を、以
 て、木、の、枝、よ、小、石、を、つ、ち、し、前後、た、た、り、て、突、之、る、に、一
 も、突、死、せ、し、ま、り、諸、士、怪、て、仇、貫、父、平、と、云、る、鎗、の、達人、は、女
 子、に、代、て、突、に、不、中、後、ハ、驚、く、突、と、云、共、あ、ハ、られ、に、中、る、と

か。少年笑て君軍勢多戦場。さてその内を求ねあり。捨
合の務員を求めると云けり。若者大將を立て名もかき
下郎のふりて。吾々に向ひて言ふ極なり。打捨るもあ
べた。幼年に免れて許すや。後の戒は拳銃可也。せん
と。この村を去ると云る力士。立掛けて女年の頂を髪を引脱
て。其腕を捻じてま逆極に投出せり。残る諸士八九人推
あ。時めと援連て掛り。ハ。飛退て例の立本を引抜て空
空に敲き散せば。或は太刀をおろされ。頭を打れ足を挽
して這くに逃去ハ。跡見返て宿所はゆぬ。此女年母死て育
目の父一人あり。城戸次郎右衛門と云。此子を次郎右衛門
廣と名付く。まう時北斗七星の内。一星長走て。家小頭
り。幼より骨柄人に。終れ好て徳をつ。人志極てたあり。母

死て父は孝ありて。近隣亦憐て。これを兄。継次郎太良立地
て。晝の働を父に告れハ。父大に驚て。これ大変事あり。城下
に住して。藩士は又向ハ。自ら力を立と。近隣の者
共。我集て。談をれハ。皆一同に。此方より。許て。謀にあく。す
と。元屋中へ。訴るに。義亮も。同王ひて。武蔵の甲乙士の
恥る。而もあ。す。却て。渠をあ。つ。し。諸士こそ。不賞を
と。前日の諸士を集め。次郎太良の業を可試と。石。呼。め。ハ。
次良太良早速。よ。出仕せり。下知有て。穂を。援。一。槍。我。並。並。て。
其術を。争。ハ。し。む。に。城戸女も。不屋。九人。を。相。手。と。て。不
残は。務。けれハ。夫も。も。藩。中。も。て。残。よ。危。矣。あ。る。者。人。遠。立
合て。皆。負。け。る。に。そ。義。亮。大。に。感。心。あ。つ。て。城。に。萬。夫。不。満。の
士。眼。で。九。人。を。あ。ら。び。我。に。仕。へ。臣。下。と。な。り。て。ゆ。さ

まぐと。時の喪更ありけれハ。城戸に於て振舞ひ仕友の儀
ハ父に於て。お清をさすべしと云て。暇をとりて立歸。お細
を諸子に父ハ大に悦で。何とて仕友の更ハあさるると云
ふ。次良太密にゆけるハ。尚主賢ありと云。大里又家
のあつと主君を執國を棄り。苟も我先祖足利家の名に
て。かゝる不義の家に仕んとたゞひ。餓死せしむ。我者の恥
る所あり。故に父に於て。清をささんと語り。さうと云に。父
ハ涙をながし。まも貧苦せしめりて。只汝を仕官せしめん
とのこり。ひいにいゝくも。勇士の義を不怠。且家には
ざる。神妙さよ。行末頼母布を授け。父子歡喜して。近儀
は。酒をさしめ。いゝバ。徳人おきて。次良太府が。例を貴。莫
聖日。城戸より。昨日。相とあり。さる。諸士。城戸と。益和。睦

て。今より。念。い。と。城戸へ。振けれハ。父大に。怪て。これ
を。止るに。次府太良。これを。不。同。渠より。和儀を。全せん。と云
を。かゝり。廻。之。ハ。曲ると。かゝり。あり。さる。ハ。見せり。や。不
通の。事。と。大。恐る。に。は。る。と。なり。と。さ。り。や。う。は。長。束
城戸へ。入。来。れ。ハ。徳士。悦。て。答。應。し。振。舞。劍。力。業。を。試。し。信
服。して。若。年。と。云。た。師。と。なり。て。あ。る。所。と。底。心。より。賞
與。して。城戸。返。ん。と。さ。る。時。は。當。て。一。回。は。ゆ。ける。ハ。今。目。改
て。和。睦。止。れ。ハ。心。中。は。一。物。も。な。し。朋友。あ。れ。共。佐。貫。父。平。三
村。を。太。吏。い。ま。さ。心。腹。と。け。ど。と。思。へ。て。今日。の。會。に。決。り
り。い。く。ハ。仇。あ。せ。と。あ。る。ん。う。か。く。や。ぞ。我。く。さ。恨。あ。さ。説
ど。と。云。け。き。ハ。城戸。も。念。い。ま。志。誠。附。して。立。歸。る。途。中。は
て。佐。貫。三。村。あ。つ。て。さ。る。通。し。が。城戸。を。不。足。付。して。去。る

ぬ。城戸何とやらんやと掛りいそ。此立ゆ。尺るに門を鎖こ
 王父他へ移しやと近隣よむれ。主ゆを柱に搦。きり急
 ぶ縄を切り。どき頻に父の身の上。づる。我が家の戸
 を打破て立入れ。無慙や父次郎。大馬つを柱に敷く。縛こ
 て左太の腹腹より礫に掛。きり。次良大郎。れをうて。色
 をこて大に歎。き。世に暴悪の者。あけ。大科。を。盲人。を。如
 して。殺。と。人間。の。業。に。あ。る。と。泣。く。死。骸。を。あ。り。て。近
 隣の者。よ。回。へ。む。佐。費。父。平。三。村。甚。大。丈。暮。方。に。来。て。我。と。我
 綁。を。由。身。の。家。に。這。入。り。が。き。め。り。ろ。ん。歎。ハ。三。村。佐。費。と
 と。教。け。ろ。に。ぞ。先。刻。如。遠。に。見。つ。れ。た。を。也。大。不。知。通。せ。し。こ
 そ。天。命。に。お。さ。り。と。齒。を。う。み。拳。を。握。り。狂。の。め。あ。れ。ハ。百
 姓。大。恨。く。よ。か。を。つ。け。父。の。遺。骸。を。葬。り。ら。る。所。よ。訴。あ。つ。て

義。孝。大。に。立。後。あ。り。て。あ。人。を。お。れ。け。る。即。時。は。通。電。して。尺
 金。を。因。茲。次。郎。太。郎。よ。金。銭。を。賜。り。首。尾。く。款。を。付。て。後。尚
 家。へ。仕。官。を。と。め。り。と。多。く。恩。言。あ。り。け。き。ハ。次。郎。太。郎。良。親
 附。して。即。日。安。房。を。立。出。て。足。り。あ。る。せ。て。旅。行。を。と。

城戸持廣仇討 附 石黒彈左衛門事

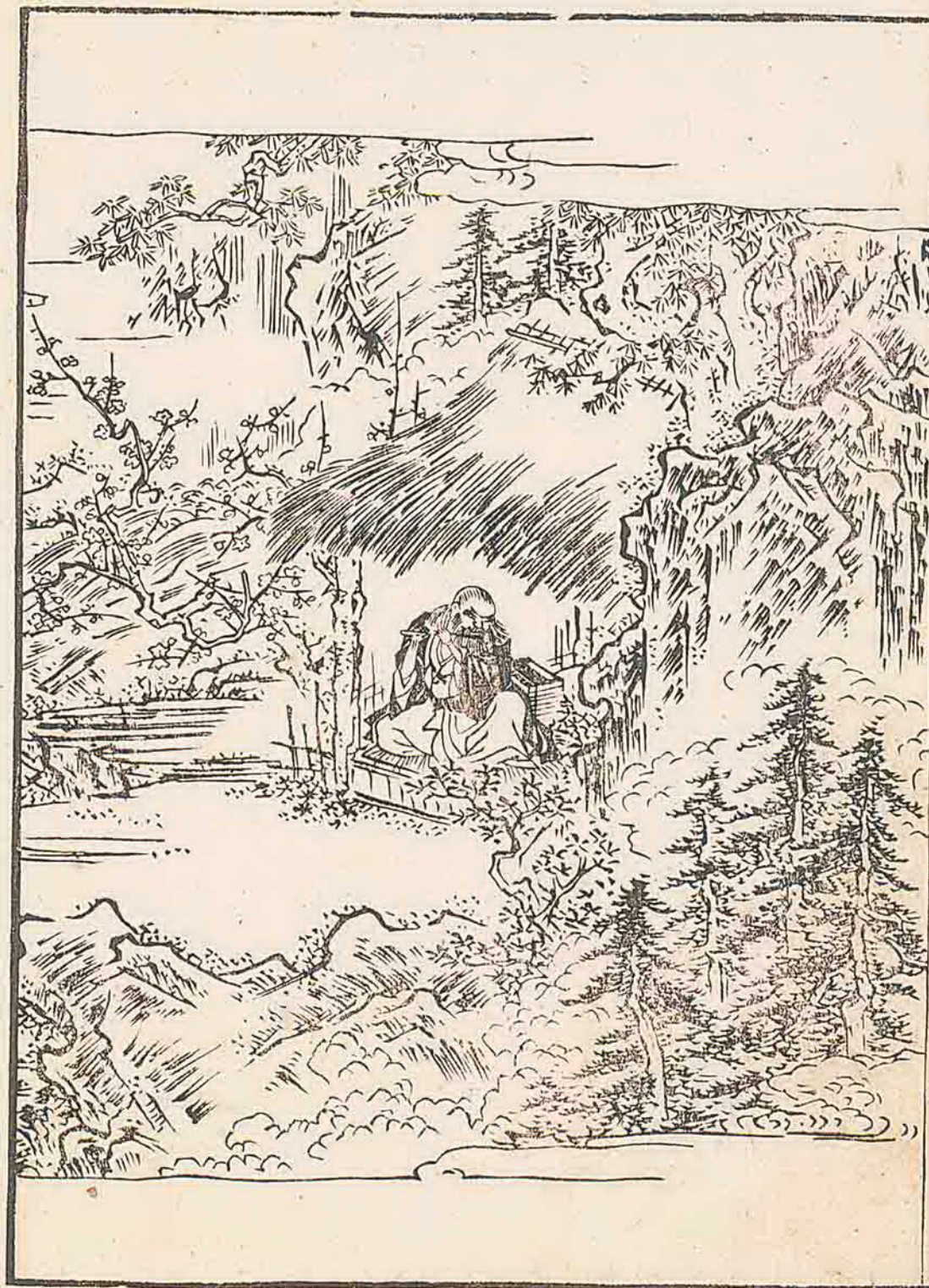
初。て。山。形。八。郎。ハ。甲。州。に。掛。り。小。仏。峠。を。越。て。八。王。寺。に。あ。り
 那。に。娘。我。を。指。教。る。に。も。つ。て。お。見。れ。ハ。豪。民。よ。て。家。最
 高。大。あり。立。入。て。娘。を。と。り。あ。ひ。あ。れ。り。と。云。に。父。母。夢。の。心
 地。よ。て。色。出。取。附。近。より。外。を。あ。た。ハ。八。郎。候。の。あ。や。を。お。決
 き。ハ。城。上。娘。再。生。の。大。恩。あり。某。ハ。泉。田。氏。よ。て。貧。乏。く。り。き
 せ。し。に。通。り。娘。を。甲。州。へ。差。越。し。に。途。中。に。て。集。れ。れ。詮。話。を
 考。て。只。神。仏。よ。り。る。の。こ。あ。り。に。今。日。不。思。お。見。る。と。育。老

の浮木は又あつて八良を奥へ清一様へにりてなれ
ハ。山形も後の疲までと救ハ一宿して翌日お僕も令々
州へ海りしめ家身も総及人立越んとするを父母娘強て
押留て二三日逗留しける間ハ所成物も抱されてお休
けり。父母心をみて薬を用娘も急て例をえられし書狀
者病もあつて二日熱もあつて山形も人変をり死すべし。七
八月をこて熱も退き救済金くふれとあり。心神書ありけ
ま。床中にも起り炮火を振るに娘例に立てり。寐るま
ハ。大又驚て炮火にこれを足るに睡顔秀麗いふ。さう
と忽ち情動止む。さうさうさうを定てきけり。これ
を驚し。いふれハ。吾例はかく眠るのくさや早起きて奥へ
行べしと云ふ。系に娘定るとおろしひて今宵ハ。君の病邪

退るるにや。此やどにかき容辨父母より欠自らが悦び上
り。例に居て今宵に不限熱もつとくをり。さうさう。お疾
交に立て或ハ終日臥を押し或ハ通宵抱まいらせり。蘇生
の大恩此時を一を報し奉れ。聊も勞疲するところ。と
それハ。ハ。所盡心乱る。さうさう。ぬめ抱忘れをさうめ。前
り。今宵ハ。常に僕。熱も悉く醒されハ。所身も立返り
休息あれと。けり。ハ。娘ハ。此付。さうさう。と。奥く胸を押し
めて。自ら一旦盜賊の因となり。汚名をぬき。おの人。お
記。戀誼ハ。和布。と。なれ。ハ。山形にて一度君を見奉りし。を
情頻に。おて。や。じ。と。い。さ。と。熱。大。身。の。程。を。願。ふ。ハ。君。の。身
ハ。あ。い。さ。る。を。お。れ。里。あ。い。死。を。抱。て。志。を。あ。り。さ。う。屍。よ。一
言。の。情。を。お。ハ。と。云。お。し。よ。た。ま。り。と。云。終。て。涙。ら。と。面。の。め

くまに懐剣を把て自害せんと。八郎急よ押止て。やま
いりま意を返して死よ及ばざるなりと。陣ある
なりが。相更不便の情や。おどく。必ん我短く思へ。わ
も厚き志何とて疎略に。ふべき。病も平愈せば快く思を暗
ん。契約して。情を。わかれ。娘ハ。恨恨で。誓に。相
譲に。及る。が。俄に。家内。強立。闘諍の。多き。ま。娘を。真
へ。進め。や。ハ。良太刀。提て。立出。られ。盗賊。多く。入。に
亭主。滄を。て。もの。者を。從て。防。き。勢。盗賊。は。款。を。べ。や
も。久。ざ。り。な。き。ハ。ハ。良。齒。喘。を。な。切。戸。は。う。り。太。刀。ぬ。き
ぐ。雷。の。あ。り。る。が。如。切。て。出。大。勢。を。返。接。り。七。八。人。忽。ち。切
殺。せ。ハ。味。方。は。勢。に。利。を。ひ。て。切。先。を。並。て。切。まれ。ハ。盗。た。叶
じ。と。ハ。方。へ。近。敷。に。一。人。張。本。と。久。く。ある。大。男。恥。と。や

思ひむ一人取て返一泉田。下部を二人と切傷し。欠。あ
ん。こ。ま。ろ。を。山。飛。見。より。去。者。あり。そ。こ。を。引。あ。と。馳。奔。て。將
我。と。ん。く。け。ふ。が。盗。賊。の。お。太。刀。を。死。して。小。腕。し。う。と。か
れ。ハ。奴。も。曲。者。よ。て。太。刀。を。持。て。引。け。り。ハ。良。治。り。と。門
詰。で。腰。を。ひ。移。つ。て。投。出。せ。ハ。大。勢。集。り。生。捕。り。泉。田。大。に
感。心。し。君。ハ。賊。に。神。人。あり。大。病。の。身。と。て。必。し。働。比。類。を
く。そ。賞。お。れ。張。本。を。生。捕。れ。ハ。後。の。愁。を。明。る。で。城主。に
訴。て。刑。罰。に。け。り。と。大。庭。の。大。本。を。あ。り。傳。付。門
を。鎖。て。皆。く。休。息。あり。な。き。ハ。八。郎。も。座。敷。へ。出。眠。は。然。と
なり。せ。が。あ。り。ても。盗。賊。の。も。う。き。一。寸。の。勇。ま。り。助。む
や。と。思。ひ。れ。ハ。密。に。起。あ。て。盗。賊。は。出。る。を。縄。を。懸。て。連。り
遁。去。へ。向。後。う。な。業。を。あ。さ。と。我。を。鎖。で。も。勇。を。顯。せ。と



一とやけしハ盗賊候を流し君政親とて武勇並に實に
 凡人よりあらず思慮あるて某の一命を惜み何をも
 さらんや某ハ石黒彈を射つとやそのなり。浪廢して今
 谷堤の姓の家態大郎が家は偶居とせ度北條家生実の所
 安房の里見と一戦あつて敗軍を刑捕んと心掛に
 近邑の盜某をこの家の財宝を奪んとてこれよりて
 交に來れり今君の一言を因て旧惡を改めて力を信義に
 立てしと山形が姓名を尋て城を棄て逃れり一島ん
 為付度おへ入しが風を心付生実の馬而一條と合戦の由
 氏細忠代の名將あり。而取極しと云大甚危し。今既恩を
 以て怨仇を心の停に討められ危をきて助けんばある
 へうも。然大娘が情多田史駒が深志告ごとて走んを

我を失せされ大盜賊を流しと云一知る者ありハいふ
 不危難うすんと思惟して一書を徳てこれを机上に至
 庭前の松を攀て堀の外へ立出指の堀一丈許あるを忍い
 と云て躍越おに任て立退しと云る霖雨をれど信
 以外歩行は難しと云飛渡大に疲勞して七八日を經て漸
 く生実におかれハ某の如義の郷里見と合戦し鴻臺にて取
 合ある由あるハせめて一度の功を願ひ旧時の恩を謝を
 へしと馬をりしむるに彼星鹿毛某者ありとて繫置りこ
 れ幸と信じてゆらると飛乗一鞭をあたふに人馬相應
 て疾と矢を射る如暫時まゐる人某付に軍既果て里
 見家破くに敗れし所而も危なく一箭の下に討死を
 ぬぐと云大い力を盡し暫く悲涙をなれけるが備しも

あき事あらねば狂ふ也して戦場を一望せしに敵軍の士
ある側^{うら}の林中よりあ人立出^だしが見^みえや音^{おと}能^よ可^こき
退身^{たいしん}せり昨日の一戦^{せん}は古傍^{こへう}家^けあ^あく討死^{うちし}せりと語合^{ごご}て逃げ
るう向^{むか}の方^{かた}より若^{わか}死^し士^し族^{ぞく}と入^いて急来^{いそぎ}し^しが彼^{かれ}あ人を尺
ふぞ怨^{うら}の死^しをな^なきしむると士の仕^しうに^にあ^あるもあ
あひうるを次第^{しだい}を^をあ^あるも遁^にぬ^ぬる^る常^{じょう}に捕^と負^ふを^をせと
呼^よば^ばあ^あ人^{ひと}大^{だい}は^は仰^{おほ}天^{てん}せ^せう^うそ^そ是^こ非^ひた^た力^{りき}を^を抜^ぬか^かし^した^た右^{みぎ}
より切^き掛^かを^を拂^{はら}除^ぞつと^と入^いる^る村^{むら}う^う狼^おを^をれ^れより早^{はや}く^く逃^にげ
る^るも^も伏^ふ費^ひは^はう^うさ^さも切^き付^けを^を後^ご流^{りゅう}してあ^あは^はう^うさ^さ何^{なん}を
く二人^{ふにん}を^をお^おて^て伏^ふ高^{こう}ま^まに^に仰^{おほ}上^{じやう}け^け側^{がわ}の^の大^{だい}木^{ぼく}の^の板^{いた}を^をく
し付^け板^{いた}を^をれ^れて引^ひ走^{そう}せ^せバ^バ八^{はち}尺^{ふく}許^{ばかり}の^の槍^{やり}と^とあ^ある^るこれ^{これ}を^を提^ひて^てい

うにあ人^おあ^あま^ま未^い練^{れん}の^の恨^{うら}を^を含^こみ^みあ^あま^まう^うさ^さを^を合^あふと^と不^ふ叶^せ育^{よく}
人の^の父^{ちち}を^を磔^{さく}に^に掛^かけ^ける^るし^し天^{てん}罰^{ばつ}思^{おも}ふ^ふれ^れと^とた^た右^{みぎ}より^{より}突^つつ^つら^らぬ
き^き誓^{ちか}ひ^ひを^をま^まして^{して}止^とを^をさ^さし^し亡^は父^ふの^の妻^{めかけ}は^はま^ま向^{むか}え^えれ^れバ^バ八^{はち}良^{りやう}始^{はじめ}
終^{はつ}を^を尺^{ふく}物^{ぶつ}し^し馬^{うま}を^を放^{はな}て^てま^ま向^{むか}ひ^ひ察^{さつ}する^る而^{しか}も^も仇^あ討^{うち}と^とお^お人^{ひと}を^をり^り健^{けん}
ある^{ある}あ^あ人^{ひと}を^を小^{せう}児^にを^を扱^あり^りや^やき^き働^{はたら}金^{かね}く^く凡^{ぼん}夫^ぶの^の業^{わざ}は^はあ^ある^るも^も候^{こう}
科^か人^{にん}刑^{けい}罰^{ばつ}の^のめ^めさ^さ討^{うち}や^やう^うい^いた^たと^とあ^あと^と殺^{ころ}す^すバ^バ城^{じやう}戸^こを^を打^う突^つ
て^て右^{みぎ}の^のあ^あ人^{ひと}を^を父^{ちち}を^をめ^めして^{して}討^{うち}し^しあ^あ南^{なん}を^をめ^めして^{して}討^{うち}し^しと^と次^じ男^{なん}を^を
語^ごれ^れバ^バ山^{さん}形^{がた}も^も報^{はう}仇^{きう}の^の速^{すみ}あ^ある^るを^を察^{さつ}して^{して}赤^{あか}馬^{うま}は^はお^おの^のり^りて^てす^す突^つ
小^{せう}端^{たん}で^で城^{じやう}戸^こハ^ハ房^{ぼう}州^{しゅう}へ^へと^とあ^あれ^れを^をま^まう^うす^す日^ひあ^あ英^{えい}姓^{せい}命^{めい}を^を過^か
心^{こころ}底^ぞを^を語^ごに^に及^{およ}さ^さり^りし^しハ^ハ其^{その}の^の身^みを^を軍^{ぐん}に^に心^{こころ}を^をあ^あて^てこ
く^くり^りて^て急^{いそ}さ^さり^りる^る

長尾監物生^{ななおのくわんぶつ}五^ご 山中^{やまのちゆう}を^を異^い人^{にん}事^じ

下野國二荒山の帯に長尾為光と云る浪士あり、本國越後にて領主為景の氏族ありしが、為景の不義を悟て國を退爰に來て住居せし一人の男あり、三郎と名付るも、三歳に物言ともし、父母愁て、元來其父の如見を信じて行て役し、あるれ、伴て父母如見、多難し、三郎を教ておせむるに、おれ、終て只其司さ、我心に天下を定むべしと云けれ、ハ父母大に始てお言とを信び、且も其の大なり、讀て、又より伴てゆり、其事を向ふに、色に従て、分別せむ、これを寵せし、出家に便て、書を讀むるに、一讀して、永く死に、十二三歳にして、博識の名あり、我國のるあるれ、礼を厭ふ、名士に、多隱れ居に、因て、武藝を、むるに、其業自然に、練磨せ、十六歳にて、兵書を讀て、始て、當時天下に功

を、立し、これに上越す、大事件と心付られ、晝夜六韜三略に眼を、さし、と云、大い、其心を、激せず、或、内五月中、勿天、晴ける日、三郎、山を、逍遙せしに、不覺、社後の、高嶺、攀より、お、報者、い、不消、梅花、始て、因て、深山の、系、目を、悦し、如、頂上、小室、に、奥、山、の、色、望、く、けれ、ハ、其、名に、應て、其、乃、に、果して、一の、窟室、に、是、疲、せ、た、ま、ハ、立、あて、見、る、に、一、人、の、老翁、白髪、を、礼し、机、上、に、書を、披、き、快、く、笛を、吹、けり、三郎、如、そ、り、山、中、に、心を、清し、候、き、る、人、も、きける、に、や、と、靜、ま、を、り、ある、れ、ハ、笛、を、納、て、長尾、三郎、侍、系、に、近、く、こ、も、る、人、來、へ、と、我、名、を、呼、れて、い、ぬ、し、あ、ら、う、別、近、く、あ、る、れ、ハ、老翁、の、曰、天下、混、乱、し、て、人、民、休、む、る、こと、な、れと、百年、に、乃、ぶ、天、北、斗、星、を、降、し、て、礼、を、請、ん、と、中、海、其、一、人

にして明主に就て必大功を立てん。然るにいまも兵馬に達
せし故に今日汝を友と迎ふる。吾今二巻の書成あつて
これに續てこれに通ると記す。之才の要を尽し百戦危
くもし何ぞ漢土の無事のこにて兵權の活路をゆんやと
ふつゝ是を授ふとれ。之師ハつと相載し軍界の妙術
未だと饑渴に水食を欲ふや。不思先生の秘書をゆて
前の望眼は足ぬ。然れども是も指掌に解るに難う。願ひ先
生に授あしめ。老翁笑て此巻國家にして解に易し再
三熟讀せ。自ら機密に達せ。且汝に一術を傳ふと云
て卷二の書一巻を別にあへ。自ら起て之師と立。而七ハ
之の妙術を傳ふ。此書によりて熟さば。力士に五倍するの
利ありんと教けき。ハ。二帛大は悦で深く恩を謝し。されハ。

老翁言て吾汝と相見ると今日に限れ。汝五十歳にして明
君をゆて起るハ。天下一統の功を立て。英名を萬世に傳へ
し。田十にして起るハ。天下半國の功に。終ん子孫に功を
を傳へし。三十ふしと起らハ。功一國を治るのこなり。然
大名を不朽に垂ん。二十にして明君に達ハ。大事業若鬼神
不測の功を。大に甲斐あり。名湮没して知遇を天小
奉ぜん。のこ。然れども起ると人事の計る所にある。如く。小計星
一層光を減む。時。君臣統のめくに起る。名を至今に任
て私の心錢抱べ。うらと云。早うて。之帛を促て下。い。あ。こ
えむ。二帛。昔の名。功を惜み。され共。是。此。は。不。及。お。謝。して。立
別。一。町。計。り。を。思。へ。ハ。白。雪。傍。り。起。て。眼。見。も。不。分。夢。中。成
也。ち。あ。く。は。して。須。臾。は。堪。に。下。り。看。ま。り。昼。夜。三。巻。の。書。

を悲しく、竟に心神破れ、死に赴きて居たり。當時、徳將の賢臣
を蒙り、未だ合戦の勝敗を定む事、掌を視る如く、月を鑑
て、酒食を清く調て、再山へ登りたり。其時、
ハ候を以て、立向ぬ。二良十八歳、父母相繼て歿し、け
れ、悲哀してこれを葬。一歳を過て、二荒山を出、良亦愛
を蒙り、二良を召連て、宇都宮の城より一里餘を隔て、民家に
居宅をいとよき、此所へ暫く住居して、世の五福を伺はる。
或時、一人の士來て對面せん、とを乞はれ、長尾重忠と云ふ。
して相見ると、貌相溫和く、智量充溢けり。長尾心喜
て、其姓名を尋ね、彼士も、長尾を見て、主君人を慕ひ、歎
て、某ハ下総國の浪士死田伊豆と申者なり。幼より、其恩を
以て、常にこれを誦ると云々。未だ、明主、殊に智傑深遠の人

を不見心忍士を求て交を結んとす。今第二荒山に詣て始て君の雷名を聞て、心迫きたつて一二の教示をもくと秘密よく傳へられ、三良を凡庸あらざるを悟て何を獲て幸ふの英名をくすり、鳴臺の故軍を求然に起て生靈の計策を献。困危の間に、一色が國を助さるる人よあはれや。西田大に驚て此事ある者稀あり。君如何して知覺せしや。毛虎笑て盗うく盗を知り、智者能智者を知るを教へてせむ。ありと云けれハ、西田信服して敢て不棄自と。畧を説て兵の奇微を説も、毛虎傾けてき取ハ一時の奇才あり。恨くハ變化に暗しと。西田が未微を言ふ。機密に盡てこそ余も前を難して死見を動。評論中變化を究うて、西田酒に酔ふるや。暗然として思ふるに似たり。不思貴歎して君ハ

誠に神人あり。何ぞあらずと恥を制して天下の危難を不救
 や。長尾曰。おるるに臣位にして上に明君を戴くあらばん。バ
 何大功を立るとをゆん。今の諸侯名將猶あつてもこれども
 天下を救ふ能はず。故に徒ら浪費す。若し明主起て是を輔
 佐するに及ては。是れも果して其に國家に力を盡さんや
 と云へば。おるる大に非ず。君と臣に明君あるば一臂を助
 て大馬の力哉。喜ひ。年来の鬱懷をひらく。遂に心平
 を得。おるる別て鑑み。はるる是より。二即改名して。長尾
 物為明と号し。於勇士をり。やめ。廣文。成結んとせり。
 居り

